

## 今を生きる

第16組常照寺 森林 晃祥

12月となり、いよいよ本格的な冬の到来を迎える時節となりました。今年は特に、新型コロナウイルス流行のなか迎えることとなり、その感染拡大の兆候が顕著となるなか、いろいろな情報によって、右往左往させられる状況下、私の地元でも感染した人が出たということです。たかがウイルス、自分の健康状態を良好にしておけば大丈夫とたかをくくっていたのですが、いよいよ足元まで近づいてきたという感が否めません。特に根拠があったという訳ではありませんが。

私はもともと「自分は自分、他人は他人」という意識が強く、世間の流行には無頓着<sup>むとんちやく</sup>で、便利であったり、自分に合うものであれば取り入れるという程度で、取り立てて何々がしたい、何々がほしいということもありません。それはちょうど、私が青年期を過ごす1970年代、学生運動も収まり、政治的に無関心な世代として、社会（特にマスコミや有識者等）からシラケ世代、三無主義<sup>さんむ</sup>「無気力・無関心・無責任」と揶揄<sup>やゆ</sup>されてきた世代です。すべての若者や、すべてのことがそうであるのでは無いのですが、全体的な雰囲気としては当たらずとも遠からずの感は否定できないような気がします。

時代の変遷とともに、私たちは、自分の意識下には、その時代の風潮に色濃く

影響を受けています。戦後「所得倍増論」や「日本列島改造論」等による施策によって、経済成長とともに、経済偏重の趣<sup>おもむ</sup>きは濃く、その恩恵も著しく、知らず知らずのうちに殆<sup>ほとんど</sup>どの人はその潮流に乗っていたのではないのでしょうか。私もその流れに乗っていた一人ではありますが……

そのことは、もうずいぶん前のことになるのですが、修練という資格修得のための研修のなかで、あるスタッフの人が「あんたらはええわね、食えるところで話しているから。われらは食うために命懸けなんや」と言われたことを話されました。その人は北海道の漁師をしている人ということでした。私はこのことばが、今の今まで、のどに刺さった小骨のようにずーっと気になっています。その「答え」を見い出せないままに……